

幸

福



020632-000-4

特62-84

幸福

ドルワール・ド・レゼー/著

M44

ABI-0448



特62

84

福幸

(1)

幸福

ある、
 「吾は世を渡ること既に百三十年、而も其間に
 受けた災難は實に夥しい」と、
 今世界に生きて居る人

今より凡三千六百年前ヤコボといふ老人が
 ブト國王のファラオに對つて斯ういふたことが

明治
 44. 6. 10
 内奏

々、上は金殿玉樓に住する、王公貴人を始め、下は空
 を天井とし草を褥として轉々移り行く乞食非人に至る
 まで皆此老人と一般、渡世の難儀苦痛が多く幸福の少
 いには嘆いて居るであらう、現世に於て満足し得ら
 れるものが一人も無いは素より、苦痛悲哀の無いもの
 は決してありません、只痛苦と悲哀とが人に由つて
 違ふのみである、自分が健全であつても、父母妻子眷
 族の中に病人があるとか死ぬるものがある、又吾が妻
 子眷族が揃つて健全であれば、現世に最も重寶な金錢

に嫌はれる、幸ひに生計にも困らず、眷族健全であれ
 ば、世間に嫌はれる、他人から害を受ける、或は其子
 女が不孝だとか放蕩だとか、何かしら自分を悲ませ苦
 ませることが必ず着いて廻る、分けても世間から視て
 幸福者と羨まれる高位高官の人、富豪貴人などが、其
 内幕を覗いたならば、身分の卑い貧乏な労働者よりも
 更に多くの苦痛と悲哀とを有つて居るのが常である、
 要するに、泣いて生れ、泣いて暮し、泣いて死ぬ、裸
 体で産湯を使い又裸体で湯灌する、之が人間の一生で

ある、文明の社會に於ても野蠻の社會に於ても畢竟人の一生は是である。

嗚

呼果して人間の一生は斯の如きものであらうか然しながら茲に合點の行かぬことが一つある、

人間には飢ゑて食を求むるが如く、渴いて水を望むが如く、燐々として幸福を望むといふ情の火が自然に烈しく燃えて居る、如何なる人でも風癩白痴で無い限りは、決して此の幸福を望まぬといふことは出来ないことである、人々が皆營々として何かの働さを毎日して

居るのは其目的が皆此の幸福を得やうとするのにおゐる勿論人に依りて其幸福とする所の目的物が差ふ、或人は學海に名譽を望み、或人は大發明の名譽を望み、或人は英雄豪傑の名を望み、或人は社會の恩惠者たる譽れを望み、或人は高位高爵、或人は金錢財寶といふやうに望みは異つても皆之を得たならば人生の幸福であるかと考へて一生之に向つて全力を盡すのは同じである是等の望みの中美名を千載に遺したいといふのは此世の幸福の中には一番高尚な望みである、然しながら甚

福幸

(6)

だ不完全な又不安心な幸福といはねばならぬ、先づ人が此幸福に向つて一生涯全力を献げても必ず得られないといふ譯ではない、却て失敗者となつて餘り人にも知られない名の無いものとなつて死ぬるものゝ方が甚だ多い、中には目的を達して名譽を得るものも無いこととはない、唯極めて少いのである、然し斯く名譽を得たとしても此少數の人が果して満足に思ふかといふに決してさうで無い、既に世に名譽を得るや否最早不足を感じ始める、名譽は忽ち消ゆる煙の如くたと物の本に

福幸

(7)

も書いてある通り直ぐに詰らなく思ふ、有名なるユデア王ソロモンの多くの書や、羅馬皇帝マルコレリオの書いた観想録などを讀めば、彼等が世の終りまで傳はるほどの大なる名譽を得ても忽ちそれに飽いたことが了解される、シテ見ると名譽は決して人を満足させる幸福の本ではない。

如

上は高尚なる此世の幸福に就ての例であるが、世間多くの人々の望む幸福は之よりも更に下つ

て、金儲けを目的として吸々とし、爲に己れの体を傷

ふを願ねがみないほどである、然しかし此この望のぞみも亦またた右みぎと同どう様よう如何いか程ほど勞らうしても一しゅう生せい貧ひん乏ぼうに終しまるものが十じゅう中ちゅうの八はち九くである、幸さいひ運うん好こうく財かね産さん家かになつても、人ひとは之こゝに依よつて決けつして満まん足ぞくは得えられぬ、金きん力りよくを萬まん能のうの神かみとする人ひとの心こころは其その欲のぞ望みに限かぎりが無い、何なん萬まんの金かねを握にぎれば岩い崎さき三さん井みづたらんことを望のぞむ、岩い崎さき、三さん井みづとなればカカーネネギギー、ロロススチヤヤイルドたらんことを願ねがふ、殊ことに又また金かね持もちちと灰はい吹ふきは溜たまるほど不ふ潔けつになるといふ俚こゝろ言わざの通とほり、富かね豪もちになるほど強かう欲よく非ひ道だうで貧ひん民みん弱じやく者じやくに對たいして冷れい酷こく薄はく情じやうになるものが

多おほい、又また其その有あつて居をる財さい産さん其そのものも多たくは其その源みな泉もとが濁にごつて居をる、斯かる富かね豪もちが何いか如かで心しん中ちゅうに平へい安あんを得えられやう世よの怨うら恨み憎にく惡みを集あつめて何いかうして枕まくらを高たかく安あん心しんに眠ねれらやう、彼かれ等らは斯かの如ごとく絶たえず何なにかの不ふ安あんに責せめられつゝあるのである、シテ見みると金かね錢せんも亦また満まん足ぞくなる幸かう福ふくの本もとではない、尙なほ又また之これよりも更さらにくに下か等たうな卑いやしい不きた潔けいことを幸かう福ふくと思おもふものが甚はただ多おほい、即すなはち動どう物ぶつ的てきの欲よくを満まんたす快たの樂しみである、斯かる下か等たうな快たの樂しみは満まん足ぞくが得えられない斗はかりでなく、却かへつて心こころを苦くるませ体からだを害がいする禍わざの根ねと

なる、斯やうな不潔心に縛られて望みのまゝにすれば人間らしい心があれば自分自身に愛相を盡かし、良心の苛責に苦む、心の腐つたものなれば心の悶はなくとも体が弱る、病を引受ける、信用を失ふ、名譽を傷ける、財産を蕩盡す、終には苦みや悪病までを子孫にまでも遺すやうになる、斯やうなものは世に幾何も實例を示して居る。

現

世に於て常に幸福といはれるものは皆斯の如きものである、今假りに右等現世的幸福なる名譽

財産遊嬉などを以て多少満足が得られるとしても、斯る幸福は唯束の間に消ぬるものである、如何なる大富豪でも、如何なる英雄豪傑でも、如何なる放蕩家でも其名譽其幸福其快樂は僅かに數十年で後には悉く之等棄て、墓所の草を肥すの料となつて仕舞はねばならぬ、死は人間に免るゝことの出来ない行末である、人類全体に平均を懸ける斗掻である、墓所に入る前には如何に差つて居つても、一旦其中に入れば誰れでも腐敗され虫に食はれ、骸骨となり、終には土埃になつ

て仕舞の他はない、死んで後は日光のやうな美を盡した靈廟を建てられるも、往倒れて菰に包まれ一本の細抗の下に埋められるも全く同じで何等の痛痒も感じない、斯の如く何年かの後には是非とも棄てねばならぬ幸福は決して吾人に満足を與へるものではない、人性に合はぬ幸福である、人の固有の性質には斯る終りある幸福に満足するほどの狭い心はない、凡て終りあることは飽いて仕舞、後死を以て失はねばならぬ幸福には決して満足して居られぬといふのが人間の性質である。

る。

依之見ると人は生涯如何に巧みに世を渡つても、如何に苦心しても骨折つても人間の性質によつて飽くまでも望む處の満足なる幸福は決して此世に於て受けられない、此世の幸福はあつても不完全で人性の要求を満足させるものでない、近くいへば人性の要求する所は物質世界を超ゆるものである、此世の事物に優れて居るのである、此の要求に對して物質世界は餘りに狭い、此の世の生命は餘りに短い、人間の心は

餘りに廣くて終りない幸福でなければ到底も満足し得られぬものである。

二

斯

く吾人は何うでも従はねばならぬ人性の要求に適當な幸福が此世に於て受けられないといふは甚だ不思議である、けれども諺君よ之よりも一層分らない情けないと思ふべきことがある、それは何であらうか、斯く満足し得られないものは、世界萬物中に獨

り吾人々間のみだといふことである。

視

よ凡ての動物を、軟体類昆虫類のやうな極めて下等の動物は勿論哺乳類のやうな高等動物まで苟くも生あるものは皆な相應に満足な幸福を度々受けて居る、彼等は眞の智識といふべきもの即ち概念することの出来ない感覺的の智識のみを有つて居るのであるから、生物の死んだのを如何に度々見ても、死とか終りとか亡びなどの概念がない、随つて自分も後には斯る運命に接しなければならぬとか、今の快樂も終り

がある際限なく受けられないとかいふ考は毫も起らぬ
 此故に彼等は死とか終りなどの考のために今受けつゝ
 ある幸福を毫も傷けられない不完全に思ふべき所以が
 ない、近くいへば彼等は物質界のためのみに生存する
 ものだから、其望みは物質界のみに止まる、故に彼等
 動物は満腹食べて、何の邪魔もなく眠むることが出
 来ればそれで満足して居るのに疑ひない、要するに動
 物は其性質に相應した満足な幸福快樂を受けらるから満
 足し易い。

之に反して人間は如何なる幸福快樂を受けても、
 名譽財産を得ても満足されず、安心安樂に思は
 ず、不足に思ひ不満に考へる、毎度いふ通り世界中
 人間だけが斯く其性質に従つて完全な幸福が受けられ
 ないといふは、實に不審に堪へられないではあるまい
 か、人は萬物の長たるに係らず此點だけは萬物に劣る
 驚くほど深遠な學理を論じ、何千億里か何千兆里か何
 千京里か遠い／＼星々の運動や容量や熱などを測り、
 種々なる珍しい機械を發明するほどの深い智識の有る

人間が、真正の智識のない動物の受ける幸福が受けられぬとは、餘りに不權衡の話だから、之には何かの深い所以がないならば、如何にも不道理千萬矛盾至極のことではあるまいか、世界萬物を調べて見れば、星のやうな大きなもの、滴虫のやうな小さなものでも、之を研究すればするほど皆立派な秩序のあることが明らかになり、顯はれて居る、萬物中に此例外に屬するもの即ち不秩序なものは唯一つ萬物の長たる人間のみである。

三

果して左様なものであらうか、道理に依つても、

萬物中に例外なものはいつもなく皆固い規則に従つて居る、死物生物共に異つたる各々性質に縛られて居る例へば化學上に認めたる水素の性質は極めて軽く且つ燃ゆるといふので、之は開闢より重く且つ燃ゆるといふことは一度もなかつた、植物に於ても稻が米を生

するのは其性質で麥を生じたことは決してない、動物
 に於ては、其生活状態は各々其性質に全く縛られて
 一定して居る、例へば雀のやうに草や屑のみを以て巢
 を造る燕は決してない、狐の如く寝るために穴を穿り
 其中に入るといふやうな狼は間違つても見當らぬ、皆
 斯の如く物の性質は固く定つて居るものはない、之
 は凡ての形而上學でも科學でも冶金術でも養蠶業でも
 音樂でも美術でも或はズット下つて遊藝でも輕業でも
 土臺とすべき公理である、若しも事物が多少でも其事

物の各性質に従はぬことがあるとすれば凡ての學問は
 立所に破壊されるのみならず此世が破滅して仕舞、此
 確い公理によつて論ずると、世界萬物が皆各々其性質
 に従ふのに、獨り人間のみに例外で其受けたる性質に従
 はないといふは餘り不道理過ぎるから決して認むるこ
 とも信ずることとも出来ないではあるまいか、即ち人間
 のみ其性質に有つて生れた幸福を望むの念を満足させ
 ることの出来ない筈がないと考へるのは至當ではある
 まいか、何せなれば人間も萬物の一部分で萬物と同じ

く其支配される規則に従はねばならぬ、決して例外で
あることは出来ない筈だからであります。

四

サテ斯の如く萬物中人間のみに満足な幸福を望むとい
ふ性質であるのに、此世に於て之を受けることなく其
性質に従はないといふ深い問題は人間に切要な問題で
あるから往昔から凡ての識者方は種々に論じられた。

唯

物論者や主理主義などは論じていふ、之は如何
に論究するも結局解することの出来ない問題だ

から論ずるのは無益であると。此論は説明でなくて深
か過ぎる問題は之を棄てるか或は之に絶望するので
あつて如何にも詰らぬことである、斯る考へは毫も學
問的でない、テンテお話にならぬ、が唯物論者中にも
そんな意氣地なしのみではない中には左の如く論ずる
ものもある、人間は際限なく進歩すべきものだから將
來益々社會が進むに従つて満足な幸福を得られる時期
に達するであらうと、然しながら之は開闢より今日ま
での歴史と、現代二十世紀の社會の狀態とに反する論

である、開闢より苟も人間が此世に存在し始めてから
 今まで何千萬億の人々の中に、果して満足な幸福を得
 たものがあつたであらうか、苦し有るならば一人でも
 其例を擧げて貰ひたい、が決して擧げ得られまい、尙
 又現在の社會に依て視るも、實驗學の進歩により商工
 業が益々發展するに従ひ、生存の競争は愈々劇しくな
 つて人々は漸々暮し難くなる労働者は益々困難苦境に
 陥るといふは當眼形勢ではあるまいか、斯く古今東西
 の經驗に反する論を立てるといふのは、眞の道理と學

問とを態々放棄るはと耻を知らぬ心ではあるまいか、
 何の實例も證據もなくて空想を書く所の小説家の筆に
 等しいものではあるまいか、斯る愚論を吐く唯物論者
 等は恐るべき黒死病よりも酷しき毒を社會に流す所の
 黴菌である。

佛 教では何うであるか、之は畢竟萬有神論であつ
 て、事物の性質までも混同するものである、佛
 敎家其人によりて幸福と災禍とを混ずる、或は運命論
 宿命説を立て因縁を稱へる、其論據が搖々して曖昧模

糊だ、捉へ所がない、従つて斯る人間に密接な問題でも深かすぎて解決し得られぬ、否佛敎を以て之を説明しやうとすれば益々深かいもの奥妙なものになつて五里霧中に彷徨やうになる。

然

ならば凡ての無宗敎家は何うであらうか、彼等は斯る問題は之を考へることまでも嫌つて故意に無頓着にする、然しながら斯やうな遣方をするのは稚兒のやうな心である、目前の足許のみを見て、翌のこともまでも考へない淺薄な智慧である、斯る老ひ込んだ

幼童とは論ずるまでも無い。

畢竟

此問題には合點の出来る解釋が一もないであらうか、若しも無いならば唯物論者や佛

敎家無宗敎家の如く棄ても無頓着にしても可い、けれども實は此問題を解り易く且つ明かに説明する道が社會の初めから一つある、此解釋は極めて道理に合ふから人々は喜んで賛成せねばならぬ、甘んじて其解釋に隨はねばならぬ筈であるのに、豊に圖らんや却て此解釋を嫌ひ惡むものが夥しくある、何故多くの人が此解

釋を嫌ふかといふに、之を認めたらば自分等が守らねばならぬ義務が生ずる、傲慢や邪淫や貪慾などを抑へるといふ善行をすることに骨を折らねばならぬ、所が人間は自然我儘氣儘を仕たい、それで多く忌がるのである、尙又多くは自ら已を欺き、良心の責を防ぐために種々な詭辯を弄して、斯る解釋は獨斷的で證據がないとか、或は近世の科學に合はぬ想像であるとか、或は抹香臭い説だとかいふて、自ら已れの眼を閉ぢ耳に蓋するのである。

今茲に余輩がいふ所の解り易い而も明かなる解釋とは何であるか、それは他でもない、人間が此世に生きる間に於て、其性質に従て受くべき満足な幸福を受けることが決して無いならば、此世を渡つて後に必ず受ける時があるといふのである、別言すれば人間の性質には物質界に超なる望みを有つて居る、之は人が此世に生れて來ることが決して物質世界のためでなく、物質に屬さない他の世界のためだからである、近くいへば此世は來世に往く經路に過ぎない、である

から昔むかしから此世このよに棲すむことを此世このよを渡わたるといふのである、人間にんげんの満足まんぞくな幸福かうふくは來世らいせに有あるといふ此解釋このかいしゃくの他に吾等われらの承認しやうじせられる解釋かいしゃくは決してない、此解釋このかいしゃくを認めれば前に陳ちんべた一定不動かたいうごかぬの規則きそくすなはせ即ち世界萬物かいばんもつこぶつ悉々しつしつ例外れいがいなく各々おのおの其物そのものの性質せいしつに従したがふといふことが立派りっぱに認められる、此故このゆゑに此解釋このかいしゃくは最も道理だうりと學問がくもんに合あふといはねばならぬ。

反

之これにて此解釋このかいしゃくを排斥はきしたならば、一定不動規則かたいうごかぬきそくを背そむく、此この一つの解釋かいしゃくの外ほか如何いかなる論ろんでも説せつでも道だう

理りと學問がくもんに合あはぬ、畢章ひつしやう取るに足たらぬ詭辯ぎべんに過すぎぬといはねばならぬ、之これに依よて見みると唯物論者わいぶつろんしや無宗教家等むしゅうけうかたらが、傲然がうぜんとして肩かたを聳そびやかしながら此愚説このぐせつを主張しやうじの如何いかにも笑わらふべきではあるまいか、識者しきしや賢者けんしやであるといふ大招牌おほいせんぱんを掲かげずして、却かへつて耻入はぢいつて隠かくれる方が良よくはあるまいか。

道

理りと學問がくもんとに従したがへば、何なにうでも止やむを得えず人生じんせいの幸福かうふくを解釋かいしゃくするには宗教說しゅうけうせつ即ち來世らいせの說せつを除のぞいては解わからないとせねばならぬ、左さもなければ人間にんげんだ

けが、世界萬物と異つて愚なる性質、間違つた性質、到底も解らぬ性質を具へて居るといはねばならぬ、宗教説を除外すれば人間は其生來に有つ心と其働さと其行末とが始終も相反して、一生涯戦つて居るから、彼の有名思想家バスケルがいふた通り、世界萬物の中獨り人間のみが不可思議な怪物であるといはねばならぬ。

愚 論を師と仰ぐほどに宗教説を嫌ふといふことも勿論人々の自由であるが、然し斯く撞着矛盾人

が社會に益々殖ゆるやうだが、故意と道理を棄て、願みないやうなものと論ずるのは、狂人に對して説法するに同じだから吾人は彼等を棄てる、唯眞摯に考へる人のためのみに此小さな書を示すのである。

五

如 上論する所に従へば、人は其偽りのない天賦の性質の通り死後來世に於て満足な幸福が得られる、換言れば是れ人間が満足な幸福を受けるために造

られたのであるから、其性質に死ぬるときまで幸福を望むで止まぬ心があるのである、何せなれば物の性質は造物主に定められ或は造られたのであるから。

聖

書に記してある「汝を差別する者は誰ぞや、汝の有てる物にして貫はざるもの何かある、貫ひしならば何ぞ貫はざりし如くに誇るや」

コリント前書 四章七節

吾等は無より造られたるものであれば、其存在も靈魂も肉体も又其凡ての力も何も彼も神より貫ふたのである、故に若しも來世に満足な幸福が得らるればそれも

神より貫ふのに疑ひない、吾等は其存在も靈魂も肉体も自ら已に與へることの出來ないと同じく満足な幸福をも自ら已に與へることは出來ない、一切の事物が其本原を釋ねれば無限なる造物主に歸らねばならぬ、此故に造物主が其寛大な聖慮によつて與へやうとする幸福の受けられる道は、造物主の自ら定め給ふた道の外決してないのである。

然

して造物主は其性質が無限であるから至善である、故に造物主の立て給ふた其道も善を行へど

いふことの外に立てられない、所が其善を行ふといふことは何であるか、それは造物主が其全善なる性質に従つて立て給ふた規則を慎んで守るといふことである。此聖い規則は之を大別すれば三つである、第一は造物主に對して行ふべきこと、委しくいへば造物主を信じ之を愛し之に拜禮し感謝し、祈願し依頼し孝と忠を盡すことなどである、第二は已れに對して守るべきこと、委しくいへば惡を以て自分の智、自分の心、自分の肉體を瀆さず已を潔白に持つこと、第三は他人に對して

守るべきこと、委しくいへば自分の好まない害は飽くまで他人にも加へないやう、又自分の好む利は何處までも他人に施すやうといふのである、此三つの規則を守るといふことが取も直さず宗教である。

然

しながら此所謂宗教或は道といふのは如何なる宗教をも指していふのではない、之は造物主親

ら立て給ふた純粹の宗教を指していふのである、人間なる或宗祖の立てた、想像から出た道や、或は學者先生方が色々巧妙く考へた説を以て立てた道などは

如何に立派に視ゐても其實何の役にも立たない、何せなれば來世に満足な幸福を興へるものは、彼の宗祖とか或は學者先生方ではないからである。

是によつて見ると、人の結局なる所の満足の幸福に到るべき道は、唯一條であつて、それは此幸

福を興へられる造物主の自ら立て給ふた道のみである要するに今此世界に生きて居る約十五億の人類は二つに別れて居る、一は幸ひにして唯一なる眞の道を慎んで守るもので、彼等は來世に其往くべき處に往つて満

足な幸福を受ける、一は不幸にも此の唯一の道を取らない人々で、即ち唯物論者主理主義者などのやうな道理學問を棄てるはと智と心とが腐敗したもの、又無宗教家の如く懶惰で我儘なるもの、佛敎家の如く凡神敎多神敎或は運命論因縁説のやうな愚説を飲むもの、プロテスタン敎の如く自由研究即ち我儘勝手な研究に酔ほて居る異敎者など総て是等の人々は悉く満足な幸福を得ることは決して出来ない、是れ毎度いふ通り彼等は幸福の方へ進むべき道を取らないからである、然

ば彼等は何うなるであらうか。

聖

書に記されてある解り易い例を借りていへば、
來世は良き種を其畑に播いた人の如くで、苗が
育つて雑草も麥も共に大きくなるも、收穫の時雑草は
束ねて之を焼き麥は倉に收められる、即ち神の立て給
ふた道を棄てたものは所謂雑草で何の役にも立たぬか
ら神に棄てられて焼かれて仕舞のである、猶一層嚴し
い例を以ていへば、世界は恰も製造工場のやうなもの
で、工場に石炭の灰や鑛滓、屑などが多く出来る如く

世界にも同様な不必要ものが多く出来る、是等の來世
のために世界の滓屑であるものは、即ち唯物論者偽教
異教者などの我儘ものである。

約

めていへば、神は満足な幸福を受くべき性質を
人に與へ給ふた、然るに人は自由の權を具へて
居るがために、己の氣儘に働くことが出来る、此自由
權は甚だ大なる力であるから之を濫用すれば人性に背
き、人性を瀆することも出来る、満足な幸福を棄て、却
て此上ない不幸を擇むことも出来る、自由權は斯ほど

に大なる力のものである、動物には智と自由がないから、其働きは器械的で各々其性質に支配されて性質に反する働きは出来ぬ、人間には智と自由があるから其性質によつて自然受け得られる幸福を態々受けない、吾等人間は神の與へたい幸福であつても、受けるか受けないかは各自の勝手である、受けたいならば神の立て給ふた道に違ふの他方法はない、若しも其道を嫌ふならば、死后来世に於て幸福の代りに大不幸を受けるので、而もそれは神様の過ちでなく自ら招く過ちである。

る。

如^ま上の明かな道理によつて視れば、神が人間を造り給ふたのは、現世に於て満足な幸福を與へるといふの御計畫でなく、死后来世に於て賞として満足な幸福を與へるの御計畫である、即ち現世は世渡といふて、目的の港に往くために渡る海である、故に來世幸福の港に着くまでには、色々の難儀を受けねばならぬ、雨も防がねばならぬ風も凌がねばならぬ、波ども戦はねばならぬ、現世は全く骨折るべき處である。

太古たいにこらかの例たとへにも此世このよは戦地せんちだといふて居る、此世このよに勝利しょうりを得たものは其褒美そのほうびとして來世らいせに幸福かうかくを受け、此世このよに負けたものは其罰そのばつとして來世らいせに神かみから勘當かんだうされて不幸ふかうを受けるのである、さうして戦争せんそうに於て兵士へいしの用ふべき武器ぶきは兵士へいしの自由じゆうに撰む所せんころでなく、軍規ぐんきに定められたるものなるが如く、吾等人間われらにんげんも矢張やは神かみの定め給ふた武器ぶきを以て此世このよの戦たたかひをせねばならぬ其武器そのぶきが即ち神かみの定め給ふた一條いっすじの道みち、一の宗教しうけうなのである。

其その一つの宗教しうけうは何なんであらうか、之これを鑑別かんべつ易やすい方法ほうほうはなからうか、それは色々いろくある、が此小冊子このせうまつしに悉ことごとく記しるすことは出來ないから、今は唯ただ二つだけをさつと陳べやう。

第一だいいち、神かみ自ら立たて給ふた道みち、即ち天啓教てんけいけうならば、其宗教そのしうけうは全智ぜんち的でなければならぬ、神かみの全智ぜんちと

人間にんげんの智慧ちゑとは、無限むげんと有限いうげんの差異ちがひである、全智ぜんちより出た道みちならば其目的そのもくてき其計畫そのけいかく其深そのひかいこと其行そのやり方かた其働そのたらき方かたなど総すべて人智じんちより出た道みちとは天地雲泥てんちうんていの差違ちがひある

べき筈である、聖書にある如く、神の思と望は人の思と望と違ふ、神の思ひと望とは狭く深くて確固と定まつて居る、人の思ひと望とは狭く浅くて變り易い、故に総ての人智的の理窟や想像や曖昧な論や確りせぬ説などのある道は決して神の立て給ふたものでない、是は人間的の道だといふ明かな徴である。

第二、神の立て給ふた道は、此世に戦ふために立てられた道であるから、堅くて骨折りながら守らねばならぬ、戦ひに勝利を得やうといふには兵士に

樂は出來ぬ、傲慢邪淫貪慾懶惰などの悪心を緊しく抑へず、我儘な心を助けたり慰めたり歡ばせたりするやうな道は、決して至善なる神の立て給ふべき道でない此故に凡て守るに樂過ぎるといふことは人間的の道だといふ徴である。

此の二つの解り易い標準を以て日本に行はれて居る宗教を調べて御覽なさい、先づ神道佛教は多神教のやうなもので、神と人間、無限と有限を混同して居るはと極々曖昧なものである、確りとした説、明

かな論が一もない、貴下の教ゆる道は大体何ういふものであるかと尋ねたならば、如何にも腹に入るやう要領を得た答をする神官僧侶は恐らく一人もないであらう、彼等は必ず際限もない想像や詭辯を以て答へ、愈々深く進めば進むほど、調べれば調べるほど五里霧中に彷徨て解らなくなるであらう、斯やうな教が全智より出でた道といはれやうか。

道

徳上に就て、感心するやうな格言は所々にある然しながら大体に於て神道も佛教も甚だ守り易

い道である、彼等の祭典は宛然遊びである、其宗教上の勤めは南無阿彌陀佛とか南無妙法蓮華經を口に唱ふる位のものである、斯る宗教が完全なる善と義なる神の立てたものと思はれやうか、實に神道や佛教には人間の浅い智狭い心から出たといふ徴は明かに現はれて居る。

次

に自稱基督教なるプロテスタント教は如何といふに、佛教などよりも猶一層曖昧な守るに樂な宗教である、佛教は如何に曖昧である樂であるといふて

も、信仰すべき守るべきことが定つて居る、プロテスタン教には確固と定まつたことは唯一つで即ち自由研究といふことのみである、此自由研究といふことは、畢竟自分の氣に合ふことを信ずると守るので自分の氣に喰はぬことは信じもせず守りもしないといふのである、近くいへば之は神の道でなく自分の道である、神に従ふのでなく己に従ふのである、自分が勝手に研究して思ふやうに信じ守るといふの外はないのである。

開 開以來人間の想像した多くの謬説の中に、プロテスタン教の基礎なる自由研究といふことは傲慢心を助け慰める道は決してない、プロテスタン教の如く曖昧なる、人に依つて違ふ、勝手に變はる道が何うして全智全善なる神の立てた道だと思はれやうか左様に考へるのは無限なる神を瀆すものである。

世 界に行はれる凡ての宗教の中、信仰すべき個條守るべき條件の確固定まつて居る道は只一つあるのみである、之は世界でカトリック教といひ日本に

は天主公教といふ道である、此道の目的や計畫は深く
 て人間の智力には決して考へ出されない、其道は天の
 地よりも高さが如く如何なる深い人智より出た考へよ
 りも高い、又其道徳上の規則は決して人々の我儘な心
 よりは出されない、如何なる先生でも教祖でも斯くま
 で堅い規則は思ひも附かぬものである、又其遣方や働
 き方は最も不思議に思はれるほど人間的と違ふ、信仰
 個條が確り定まつて居るから、己れの思ふがまゝに勝
 手に論じたい傲慢な學者先生方には非常に嫌はれる、

不品行や横着なことは厘毛も假借せず厳しく道徳を守
 らせるから、放蕩者からは非常に厭がられる、斯く嫉
 れた世から嫌はれても攻撃されても、生命も耻辱も危
 険も惜まず恐れず定まつた通り何處までも守つて居る
 斯る道こそ全善全智全能の神的宗教だといふ明かな徴
 ではあるまいか。

幸

福といふ問題に就て、天主教と他の宗教とを比べて考へたならば、一は安全であり一は不安全であるといふ差がある、前にもいふた通り現世は戦地の如きもので、自分の悪心と、腐敗して社會から出る悪といふ二つの敵と絶えず戦はねばならぬ、現世は決して満足な幸福を得る處ではない、故にたとひ天主教を堅く信じ慎んで其道を守つても、此世を渡る間

は決して満足な幸福を受けることは出来ない、けれども天主教を信すれば此世の烈しい戦ひの意味、一生涯難儀苦痛を受ける所以、又其戦争と難儀とを経て後のことを明かに知つて居るから、戦争にも難儀にも安心して堪へ忍ぶことが出来る、恰も彼の大暴風雨に出會た船頭が、奮闘の後には安全な港に着くといふ望みがあつて大に慰めるが如く、天主教信者は死后着くべき港即ち神より受ける満足な幸福を考へて始終歡びと慰めとを以て此世に戦つて居る、此世に於ける不完全

福幸

な幸福は、此安全と慰めとで充分に受けられる、安心立命とは之を是れいふのである。

反

之て他の宗教に於ては、確りと定まつて居らず不確實不安心で、此世に於て信仰すべき個條と道徳上の個條も曖昧として居り、如何にしても心の底に疑の雲が潜んで居る、又死後着くべき所も同じく明晰とせず、如何になるであらうかといふ不安の念が絶えず往來して居るから、此世の不完全な幸福までも得られぬ。

福幸

人

が安心を得ると得られないといふの差が何の位大層なものであるかを感じたいならば、未だ人生といふことの眞面目な問題を味ふ程心の沈着かぬ青年の心を以てしては駄目である、又彼の禽獸的の心になるほど物質に固まつた人間の心を以てするも是も駄目である、彼等は生を人間に稟けても既に人間的の感情を失つたものである、是等のものは除いて普通の人間であつたならば、非常な恐しいこと、酷い災難なごを受けて妻子を養ふことも出来ない、所謂妻は病の床

に臥し兒女は餓に泣くといふやうな悲惨な目に遇つた
とき、眞の宗教に依らない、眞の慰めのないものは如
何に其苦痛に悶ゆるであらう、如何にして此の悲惨な
境遇に堪へ得られやう。

今

より凡二千百年前マカベオといふ人は其七人の
男兄弟が種々なる拷問を受け果てに、彼等の
母の目前に殺された、此母にして來世の幸福あること
を知らなかつたならば、如何にして其心を慰るであら
うか、又凡百年前彼佛國の大革命の時、何の罪も報ひ

もないのに、親子兄弟の一家族が悉く斷頭臺上の無
慚な刃を以て殺された、彼等が若し眞の宗教がなけれ
ば何を以て其心を慰め平然として刑に就くことが出來
やうか、近くは一昨年以太利亞のメツシナ町が大地震
で滅されたとき、佛國の領事は其三人の子女と共に即
死した、而も幸か不幸か其妻一人だけ助かつた、彼女
は年齢約三十歳であつたが、僅かに一分の間に其夫と
其三人の子女を失つて天地に唯孤獨の身となつた、實
に夢の如く、斯る大不幸を蒙つたとき、信仰なくして

神の慰めの聲を聴かないものは、哀悲に心が狂ふの外はないであらう、是等不幸の人々が假し宗教家であつても、神道佛教プロテスタン教の如き曖昧な不安心な道であるならば、迎も之に堪へ忍ぶ力はないであらう

右のやうな、特別な大災難を受けなくとも、吾等は各自が必ず受けねばならぬ恐しい災難が一つあるそれは即ち死といふことである、人間の死を恐れるのは決して弱い心でも卑怯な心でもない、これは素より當然のことである、死後のことを知らずして死を

恐れないのは、眞の勇氣ではない、假りに勇氣としても智慧より出た勇氣ではない、狗や馬も死を恐れないことがある、彼等の恐れないのは死を解せぬためである、智慧のある人間が死を恐れないのは、其智慧が味むはど物質に固まつたからなので、之は動物的の勇氣である、動物的の勇氣を以て意味なく狗死するは勝手であるが、然し斯くまで智慧を棄てるといふは實に憐むべきものである。

戦争に出で、其騒ぎに心を奪はれ、硝煙の臭ひに酔ひ、大砲の音に聳るといふ場合、所謂戦闘に熱狂して居るとき遽かに斃れるのと、永く病の床に臥して考へながら死ぬるとは大變な差ひである、智慧があつて眞摯に考へる人ならば、死といふことは實に憚しき恐るべきことではあるまいか、一生涯愛し來つた、妻子とも親族とも朋友とも本國とも無理に引離されねばならぬ、辛苦して得た財産も半錢厘毛身に附かず、受けた名譽も地位も棄てねばならぬ、是程の大事

は生きた体に決してない、是程の悲みが他にあらうかけれども此悉みよりも更に大なるは恐れである、死後を知らない人疑ひつゝある人のために、死は眞黒の淵に墜ると同じである、此時に當つて一つの疑ひもないほど信仰の堅い宗教を守つて居る人のみ安心して死ぬることが出来る、毎度いふ通り微少の曖昧も疑ひもない此宗教を信すれば平安な心で死ぬることの出来るのみならず、人々が自然に嫌ひ恐れる所の死を却て愛するやうになる、何せなれば彼等は現世に於て受ける難儀

を神に對して凌げば、死後それが満足な幸福を受ける種になると解つて居るからである。

聖

書に記されてある、現世に悲むものは幸福なり、彼等は死后慰めらるべければなり、神のために汝等人々に誇られ、責めらるゝは幸福なり、悦べ樂しめ、それは來世に於て汝等の報ひ大なればなりと、又記してある、神に有りて死ぬるものは幸福なり、何となれば彼等は其働きを止めて息まん、又其功は彼等に從はんと。

神

のためには二つの意味がある、一は眞の基督教を信するがために嫌はれたり害を受けたりするといふこと、一は此世に生きることは神に試みられるためであると承知して此世に於て受ける凡ての難儀は神の聖慮であると信じ如何に大なる災難に遇ふても神を疑はず、甘じて之を忍び、神の御憐みに依頼するといふことである、又神に有りて死ぬるといふことは、立派に善を行つて一生涯神に従ふ心を以て死ぬるか或は犯した種々の罪を本

心に悔悛めて神の宥を受けられた心を以て死ぬるといふ意味である、約めていへば神の子になつて神に愛され、又神を愛しながら死ぬるものは幸福であるといふのである。

然し神に愛されるためには、人が勝手に立てた宗教でなく、神が親しく立て給ふた天啓の宗教を

守らなければならぬことは勿論である、佛教プロテスタント教回々教などのやうな人間の立てた宗教を信じて之がために責められ害を受けたとしてそれは何の益にも

ならぬ、人間のために働いたのは人間より其酬を得るのみである、「吾誠に汝等に告ぐ、彼等は既に人より其酬ひを受けたり」と聖書に記してあるのは即ちそれである、近くいへば彼等は死後に永遠の酬ひを受ける所以がない、却て永遠に棄てられべきものである。

結論

世 界萬民の實驗より視れば、飢れたものが食を欲するが如く人々は満足な幸福を望んで居る、此

烈しい望みは人々の心の底から出るものであるから人性なること疑ひない、さうして世界萬物を視るに死物でも生物でも如何なるものでも、物は各々其性質に従つて居る、此性質に従ふといふ道理なる規則が、萬物の秩序の本である、若しも寸時でも此堅い規則に背くとか離れることがあつたならば、萬物は秩序を失つて大混亂になり忽ち破滅して仕舞であらう、此規則は萬物存在上斯くまで必要なものである。

所が奇なる哉怪なる哉世界萬物中此の規則の例外なものがある、而もそれが萬物中第一位にある高等のもの、萬物の長といはれる貴い所の人間である、何せなれば人間は其性質で満足の幸福を望んで居るにも係らず、上は國王より下乞食に至るまで昔より今まで一人でも満足の幸福を得たものはない、之より後とても矢張一人もないこと疑ひないからである、斯く深く不思議と思ふほどの問題を明かに解釋して吾人をして安心させる道は唯一つで、それは曖昧な哲

學でも社會學でもなく、始終變る實驗學でもなく、宗教といふ一條の道のみである、此道の解釋に依れば人間が其性質に従つて受くべき満足な幸福が現世に於て受けられないから、是非とも死後來世に於て受けねばならぬといふのである、此宗教的の解釋は吾人々間は否でも應でも認めざるを得ない、若し之を承知しないならば、吾人各己に對する此の重大な問題が少しも解らぬ、止むを得ず唯物論、主理主義、運命論、萬有神論などのやうな解らぬ愚説を信じねばならぬ、此故に

吾人々間は先づ、

第一 一現世に於ける不完全な幸福、悲み苦みの交つて居る幸福に心を奪れないやうにせねばならぬ

第二 此の深い問題の解決は宗教的解釋に依るの他ないならば、満足な幸福を得るためには完全な

宗教の他ないといふ道理でなければならぬ、而て又此満足な幸福を受けられる時が來世ならば、此の満足な幸福といふものを、未だ見たこと感じたことがないから、人間の智力では如何なるものであるか決して知ら

れぬ、又人間の稟けた性質だけの力では決して之を得られぬ、委しくいへば此満足な幸福を吾等に與へんがために吾等を造り給ふた造物主の啓示と其御力に依るの外之を知り之を得るの道はない。

第三世界にある多くの宗教の中に、人間の考へた色々な誤つた説で瀆されない眞の天啓教は一つ

である、それは天主公教である、此宗教には少しも曖昧なことがなく、信仰個條も道德個條も確乎と定つた宗教だから、決して人爲的の徴はなく神爲的の徴を有

つて居る

此の幸福といふ問題は之を約めていへば、幸福は決して人の外部即ち肉体や或は社會から來るも

のでない、人の内部即ち人の精神或は良心のみより出るものである、精神が神の定め給ふた一の道に遵つて潔く正しいならば、此世に於ての不完全ながらも安心と慰めとを得、又來世に於ても満足な幸福が得られる即ち此世は戦場の如くで色々な災難や誘ひを以て試みられ來世に於て其酬ひを受けるのである。

之これに反はんして精神せいしんが神かみの立たて給たまふた一つの道みちに遵したがは
 ず、潔いさぎよからず正ただしからざるものであるならば、
 此世このよに於おいては安心あんしんと慰なぐさめといふ不完ふくわんぜん全ぜんな幸福かうかくさへ得ねら
 れず、外部ぐわいぶより如何いかなる遊嬉あそびたがしみ快樂をうを受けても不安ふあんしん心しんで
 悲かなしみと恐おそれとが着つき纏まとふて居をる、其上そのうへし死後しごに來世らいせに於おい
 ては、戰場せんじやうに敗やぶれ北にげた卑怯ひきやうな兵士へいしの如ごとく終おりなく神かみ
 に勘當かんたうされねばならぬ、聖書せいしよに記しして曰いはく。

『眞まことの幸福かうかくと眞まことの不幸ふかうは汝なんぢ

の手許てももにあり汝等なんぢら注意ちゆういし

て之これを擇いめ』と。

幸かう
福ふく
終

(東京大司教代理エブラル認)

明治四十四年六月一日印刷
明治四十四年六月四日發行

定價金四錢

著者

ドルワール、ド、レゼー

發行人

林 壽 太 郎

東京市小石川區關口臺町十九番地

印刷人

藤 井 治 和

東京市小石川區關口臺町十九番地

印刷所

和佛協會印刷部

東京市神田區多町一ノ三白玉會

不許復製

266
274



